

鎮魂の灯

山梨県 渡辺時雄

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を聞いたのはソ・満・朝三国国境の凶們の山奥の陣地だった。それからソ連戦車と対決を覚悟しながら八月二十三日間島(延吉)に集結し、武装解除された。收容所では「東京ダモイ」まで待機すると言い渡された。九月半ば頃、ウラジオ通過で東京にダモイすると聞かされ、千人ずつの梯団(作業隊)に編成された我々は、夏衣のままの軽装で、日本に帰る事ばかり夢見ながら徒歩で間島からソ満国境を越えてクラスキノの田舎駅まで行軍した。

クラスキノは満州から送られる日本軍の野外集結地、ここから「東京ダモイ」の家畜用貨車に牛馬同様
に追い込まれ鉄の扉に閉ざされて、着いた所はシベリア・ハバロフスク州の中央コムソモリスク市郊外で、

アムール河沿いの原始林の中に建てられた半地下の丸太小屋の小さな收容所に入れられた(十月末頃だった)。

私の原隊は独立重砲兵第二隊と言い、在横須賀の陸軍重砲兵学校教導隊の現役兵の編成で、年も若く訓練され、更に同じ内務班のまま作業隊編成だったので団結も固く、よく働いてくれた。

私どもの收容所はコムソモリスク第八收容所(分所)で、收容人員五百人(中隊百人編成で四個作業隊、あとは設営、炊事、衛生、給与、事務等)。私は第三作業隊長として毎日原始林に入り、タポール(斧)とピラー(鋸)で木を切り、枝は薪として積み重ね、毎日一〇〇%のノルマを上げたので、第八收容所の中ではハラショー作業隊として、ソ連收容所長モスカレンコ大尉(顔が赤く鼻が高く、いつも我々を怒鳴ってばかりいるので「赤鬼所長」と呼んでいた)から特別に可愛がられるようになった。

しかしシベリアは地獄だった。零下四〇度以上の酷寒の日々、糧秣不足かソ連側のピンハネか、給与、食

糧の不配によって我々捕虜の身体は次第に衰弱していった。さしも元気な私の中隊の若者たちも、これでは働きたくても体は動かないとこぼしていた。「働かざる者は食うべからずが共産党の鉄則だ」と言っただけでノルマの達成パーセントによって一級食（八〇％以上）、二級食（五〇％以上）、三級食（五〇％未満）と明日の食物を差別したので、病弱者はいよいよ快復の機会を失い、健康な者も栄養失調となり、また生活環境の悪さからの伝染病（風邪、チブス等）も発生するなど、終戦の冬から翌二十一年の春までの間、各收容所における死亡者は相当な数であった。

私は幸いに收容所生活満三年無事であったが、主として森林伐採の作業中隊長として捕虜生活を送る中で、数限りない悲惨な地獄の絵巻を見聞きしてきた。その中で、今思い出しても胸の痛くなる事実を取り敢えず二話報告したいと思う。

第一話 生命の灯

酷寒に飢餓と重労働の三地獄の中で生きるには、捕

虜同士が助け合い励まし合って、希望を失わず耐え抜くことのみであった。

幸い私の中隊は若い現役兵が多く、内務班長だった私を信じて明るく強く働いてくれたため、自ら良い環境を作ることが出来たが、戦後方々で捕虜となった戦友たちの中には、自信を失い自暴自棄となって收容所の規律も守らず、作業もサボる者も多くノルマも上からず無気力となり、栄養失調症患者が続出してきた。

栄養失調症患者の多くは、食生活のふしだらさに原因があった。私は戦友達に「配分された食糧は何でも良く噛み、胃に負担がかからないよう唾で丸めて飲み込め」とよく話した。量が少なければ少ない程大切に食べ、舌で味わう時間を長くしようというのが私の作戦であった。「馬鹿馬鹿しい。そんな事では腹は減りっぱなしだ」と言っただけで、配分された燕麦や高粱のお粥を飯盒に入れ、更に黒パンを粉にして混ぜ、湯水をいっぱいに入れてグラグラ煮立て岩塩で味付けし、その汁をガブ呑みするという食べ方が流行した。私もやってみたが確かに一時は満腹感がある。腹の中が水いっぱい

いで、動けば胃の隅々まで満腹感が伝わる。ところがこの食べ方を一週間も続けた者は胃腸の働きが悪くなって痩せこけてしまう。この現象は他の収容所から私の中隊に転入してきた戦友に多発した。空腹に耐えながらも配給された粥や黒パンを忠実に丁寧に食べる者、そんな食べ方に耐えられず「水っ腹」で一時的満腹感を求めた者、たった半月の生活態度で同じ労働に従事しながら生死の境を分けたのもこの時期の収容所だった。

そして信じられないような死もあった。他中隊から十数人の戦友が私の隊へ転入してきた。その転入者の多くはこの「水っ腹」愛好者だった。その中で一番若いA君が強度のジストロフィー（栄養失調症）だと阿部軍医から通報があった。A君は少し動作が鈍いようだったが病気の気配は何もなかったので毎日作業に駆り出されていた。栄養失調症患者の多くは、特別な徴候もないので連側から作業を休むことは許されず、勿論休養室にも入れられず殆ど作業に駆り出され、そして伐採作業場でポツクリ死ぬのである。風もないの

に枯木が突然倒れるのと全く同じように、である。それこそ当の本人でさえ予知するすべはなかったようである。昭和三十一年三月末、日本では早咲きの桜が咲き始める頃であった。私はまだ北斗七星がキラキラ輝く夜半、偶然厠でA君と一緒にになった。室内へ入ってベチカ（暖房）を囲むとA君は黒パン一切れをベチカの上に載せながら「渡辺さん、私はなんだか眠くてたまらない。少し寝たいのでこのパンが焼けたら起こして下さい」と言って二段ベッドの上方、薄っぺらの毛布の中にもぐり込んだ。私は「いいよ、焼けたら起こすよ」と何気なく引き受けて、パンの香りに自分の空きっ腹が鳴るのを耐えパンを見つめて約五分、二、三度返してコンガリ焼けたので「A君パンが焼けたぞ」と呼んでも起きて来ない。「オイどうした」と本人をゆり動かすともう事切れていた。私は呆然としながらもそのパンを千切ってA君の口の中へ入れてあげた。こんなことなら凍ったパンを私が食いちぎって温め、口移しにしても生きているうちに食べさせてやるべきだった、と思うと口惜しさで涙がこぼれた。

そしてA君のやせ細った手を胸に合掌させ、その手に黒パンを握らせて、同室の戦友を起こして短いながらも通夜とした。そして翌朝、ギョロ目の阿部軍医と菊地衛生兵に深夜の出来事を報告した。阿部軍医は「またか」と大きい溜め息をして「栄養失調者はこんな死に方が多いよ。それでも渡辺さんに見取られただけでも浮かばれるだろうよ」と私を慰めてくれたが、私はこの地獄の運命を創り出したソ連邦を呪うだけであつた。

私は今でもパンを焼く度にこのことを思い出し、食べる前にA君やシベリアで亡くなった戦友の冥福を祈っている。

第二話 鎮魂の灯

昭和二十一年七月初旬の夕方、私どもコムソモリスク第八分所のソ連側収容所長モスカレンコ大尉が、日本側の大隊長後藤罔丸大尉と私を呼びつけて「コムソモリスク本部命令で、中央病院から送られてきた日本人捕虜の屍体埋葬作業を特に第八分所で行うよう私に

命令があつた。これは渡辺中隊の作業成績が特に良いので本部からの命令である」ということだつた。

私は戸惑つた。作業成績が良いと褒められるのはよいが、屍体埋葬を喜んで引き受ける訳にはいかないと思つて、後藤大隊長と収容所長に「私の中隊の働きが良いことは一人一人が今の立場を理解し助け合つて生きようという努力の結果である。所長の命令とは言葉こんな大仕事は私一人で承知する訳にはいかない。中隊に帰つて所長命令を伝え皆の意見も聞いておくので、一時間後に中隊全員にこの話をしてほしい」と言い残して中隊へ飛び帰つた。

全員を集めてこの話をしたところ「我々渡辺中隊は伐採作業で生きてきた中隊だ。そんな不衛生な仕事は他中隊にやらせて貰つて下さい」という意見が大半だつたが、幸い私と同じ部隊で阿城駐屯屯時から一緒に戦つてきた高橋茂明君（軍曹、東京）や鈴木武徳君（上等兵、神奈川）が、「隊長、俺達は日本人だ、助け合つて今日まで生き抜いて力つき亡くなった戦友を葬つてやることは我々の務めではないか、みんなでや

ろうよ」と私に味方してくれた。この一言は捕虜である我々の魂をゆさぶった。私は嬉しかった。そして「今日は人の身、明日は我が身の三途の川にいる俺達だ、みんな我慢して気持ちよく埋葬作業を引き受けて貰いたい」と心からお願ひした。

甲論乙駁していると、モスカレンコ赤鬼所長が中隊に現れた。随行してチグノフ政治部中尉がナターシヤ女医中尉、阿部軍医、それに日本側後藤園丸大隊長などお歴々を引き連れてのお出ましである。そして、コムソモリスタ地区収容所本部長命令で「第八収容所長は所員をあげて中央病院より送致された日本人捕虜の屍体埋葬を行うべし」との命令が出たこと、その実行のため「わが収容所内の優秀作業隊である渡辺中隊にこの作業を命令する」と厳かに宣告された。こうなれば「万事休す」である。軍命令に従わなければ抗命罪、中隊生活を続けられないことは明白である。

私は勇を鼓して「渡辺中隊埋葬作業を引き受けますが、収容所長にお願ひがあります」と前置きして、「埋葬作業中は中隊全員にノルマー〇〇%を付与する

こと。毎日下着の交換が出来るよう被服庫に手配すること。埋葬作業終了後入浴が出来るよう手配すること。埋葬作業は午後三時迄とし、その後の二時間は明日の埋葬箇所の調査、埋葬準備並びに隊員の衛生管理（休養）に充てること」の四項の条件を申し出てみた。赤鬼さん目をパチクリしていたが、即座に「よろしい、四項とも何とか叶えてやろう」と約束してくれた。日本軍隊では命令は絶対であるが、当時のソ連社会では、労働者、農民が社会主義社会の主人公であるという思想からか、職場での大衆討議という形式は認められていた。私はこれを利用する心算で演出したのだが、うまく当たって、赤鬼所長さんも大衆の前で我々に理解ある約束をしてくれたのである。

翌日からその準備で忙しかった。所長はどこからかドラム缶十個を調達してきた。これを適当に切って野天風呂施設を十カ所並べて造った。一回十人、十交代で入浴を済ませようというのである。これで一カ月一、二回の集団入浴場に行く必要がなくなるのだ。下着の交換については縫工所勤務の鳥海長吉君と高野正

夫君（兩人とも中隊要員）が引き受けてくれた。私は中隊に墓地測量班、穴掘り班、屍体運搬班、埋葬班、墓地整備班を編成、作業手順を定め準備万端を終えて作業開始に備えた。

三日目の晴れた朝、收容所の西北約六百メートルの小高い丘の広場へ、收容所長を先頭にチグノフ政治部長、ナターシャ女医、後藤大隊長、阿部軍医等に連れられて集合した。見れば背後には丸い山があり、山と丘の間の窪地には無数の屍体が裸のまま捨てられてあった。まさに地獄である。

冬のシベリアでは日本式の埋葬は不可能だった。收容所で我々捕虜が死亡するとその場で日ソの軍医が立ち合って「死亡調書」を作り、終わると身近な戦友が二、三人で野辺の送りの準備をする。今にして思えば酷い話であるが、通夜を終えた戦友の屍体は見取った戦友の手で裸にされる。そして掛けてあった毛布でグルグル巻きにして裏口から馬糞に乗せ、ソ連の監視兵が御者となって所定の屍体置場に運ばれる。

私は中隊の戦友であれば收容所長から特別の許可を

貰って墓地まで送って行ったものである。先記のように墓地とは名ばかりで、小高い山裾の窪地の、湿地帯の凍土の雪の上にコチコチに凍った裸の遺体を転がすだけである。十分と経たないうちに横なぐりの吹雪で屍体が埋まる。その間私どもは手を合わせて首を垂れ、「この次は俺かもしれない」と思いながら冥福を祈るだけで精いっぱい。天気の良い日なら傍らの雪で屍体を覆って埋葬終わりである。私どもはそれを雪葬と言った。

雪葬が終わると、ソ連の御者に追いたてられ後ろ髪を引かれる思いで收容所に帰る。そして今雪葬してきた戦友が着ていた下着から毛布まで衣服一切を一晩ドラム缶の風呂桶で煮沸する。乾くと中隊で一番体の弱い者に「亡くなった戦友の形見だ、これを着れば温かくなる、早く丈夫になれよ」と申し送ることにしていた。胸の中で「気の毒だが死んだ人は寒いとは言わない、生きている戦友はまだ辛い思いをしているから勘弁してくれよ」と、死んだ戦友に詫びるのが精いっぱいだった。形見を貰った戦友の中には、「これは温か

い」と喜び、戦友の霊に励まされて再起する者もあつた。

ところで中央病院から送られた遺体の多くは、人体実験のためか解剖されたまろくな縫合もしないで捨てられた無残なものが多かった。窪地一帯に累々と屍体が積み重ねられ、七月の陽射しに照らされた光景はまさに地獄絵図そのものである。

私はまず中隊全員を集めて谷間に眠る戦友に黙禱した後、「共に助け合つて生きて還ろうと誓い合つた戦友をこうして埋葬することは、生きている我々としては何よりも大事な作業だ。みんなで良い墓を作つて冥福を祈ろう。そして生き残つた日本人として責任を果たそう」と心から隊の皆さんに願ひした。

それから私は、墓地の位置を北側に山を背負つた小高い南向きの丘の上に定めた。そこからはアムール河が望みできた。河の流れは日本海に注ぎ、亡き戦友の魂魄はやがて日本に還りつけると思つたからである。そこには可憐な野草が咲き乱れていた。

作業は測量班、穴掘り班、屍体運搬班、埋葬班の順

に手筈通り順調に進んだが、私の胸の内は悲痛だった。「生き地獄」とはこのことを言うのだろうか、今迄は生きるために飢餓地獄、労働、地獄に耐え抜いてきた私ども中隊であるが、今日からは亡くなった戦友の鎮魂の場を造るのだと思うとやりきれなかった。しかし、この作業が何よりも神聖な仕事だと思ひ直し、みんな歯を食いしばつて黙々と作業を進めてくれた。私は隊員たちのその姿に心から感謝し、そつと涙を拭いた。

穴掘りは縦二メートル、横十メートル、深さ一・五メートルと定められており、その穴に十人の屍体を並べて埋葬し、上に白樺の枝で十字架を作つて墓標とする集団墓地であつた。

七月とは言え、シベリアの大地は一メートルくらい掘ると下は岩のように凍つていた。穴掘り班の作業も大変だった。しかし運搬班は更に大変だった。陽の当たたる場所の屍体はすでに腐乱して、少し動かすと物凄い死臭と共に体液や雪解け水が流れ出す。手袋もないので素手でその屍体を持ち上げて担架に乗せて二人が

かりで穴まで運ぶのだが、足を滑らせて転べば屍体がやにわに抱きついたり背中の中のしかかってくる。どの遺体も瘦せ細って骸骨のようだ。中には病院で人体実験でもされたのか腹を切り裂かれ、ろくな縫合もされずマジックで胸にローマ字で印をされている遺体が幾つもあった。惨めなことだ。

上の方に積まれた屍体を丁寧に運んでいた運搬班は、下の方に行くにつれてまだ凍結しているのを見て一計を考えた。それは積んである屍体の首から頸に針金の輪を掛けて引っ張り出すと、凍りついた遺体がツルツルと青草の上を滑ってついて来る。まだ凍りついている屍体を強く引き離すと、頭の毛や手足の皮だけスッポリ剝がれて他人にしがみついたまま引っ張られて行く。

いかに捕虜という異状な状況下とは言え、こうリアルに表現すると非人間的行為だと非難されるだろう。しかし私としては、「あの時点では我々は地獄の鬼畜となつて亡き戦友を引きずり回していた」と赤裸々に告白する以外にこの記録を書く術はない。もちろん読

まれた方々の批判は甘んじて受ける覚悟である。

正午少し前、赤鬼所長が先のスタッフを連れて埋葬作業の状況検分に来た。私はこの地獄絵巻は一度日ソの上司にしっかり見せておくべきだと思っていたので、屍体置場から埋葬地までの作業状況を子細に案内した。

七月の爽やかな陽を受けて百花繚乱咲き盛るのどかな山裾で、ここはまさに阿修羅の生き地獄であった。さすが歴戦の勇者赤鬼所長もこの凄まじい屍体埋葬現場を見て驚いた様子だったが、更にナターシャ女医は、軍医という見識からか女という人間愛からか、赤鬼所長に食ってかかった。「ペチェムー（何故）こんな仕事を渡辺中隊にやらせるのだ、マスクも手袋も与えないで。こんな仕事は即刻中止させる」と怒鳴り出した。そして「この仕事でもし伝染病患者が出れば私は刑務所行きだが、責任は所長だよ」と念を押した。所長も驚きながら真っ赤に激怒して「何を言うのだ。作業命令の時は女医も承知していた筈だ。作業場での衛生管理の責任者は軍医だ、マスクも手袋も医務室で

準備すべきではないか」と怒鳴り返した。そこで政治部のチグノフ中尉が仲裁に入って、「とにかく今日は午前中で作業を中止させ、午後は衛生上の処置を完全にして明朝から作業を続行させたらどうか」ということで、どちらの顔も立てながら私達を応援してくれた。

それでも谷間から運び上げた戦友の屍体を完全に埋葬し終わるともう午後二時を過ぎていたが、中隊の戦友たちは一言の不平も言わず黙々と働いてくれた。戦場では何人も戦死者を処置した私も、この凄惨な鬼畜の処置を、任務とは言え容認した私の弱さを戦友に心からお詫びした。

女医の意見具申もあって我々はその日の午後はドラム缶の野天風呂に入ったり、マスクや手袋の配給も受けたり、おまけに薬を飲まされたりしながら、その日は衛生改善という名目で一休みした。

そんな経緯もあって、それから毎日昼頃になると収容所所長は女医と一緒に埋葬作業を見回りに来るようになった。ノルマのない作業だったので所長の一存で午前中で作業を中止し、収容所に帰って入浴後昼食、

午後は衛生休養ができたので少しは救われた。

それから十日ぐらい埋葬作業を進めた七月下旬のある日、運搬作業班長をしていた横江春一君（軍曹、名古屋）が私のところへ飛んできて「隊長、加藤軍曹らしい遺体があります。すぐ見て下さい」と言うのである。「そんな筈が……」と耳を疑いながら屍体位置に駆け下りて見ると、いま氷雪の中から掘り上げたばかりで硬く硬直してやせ細った加藤好友君が合掌した姿で寝かされていた。頭の禿げ具合、特徴あるカイゼル髭、まさしくわが独立重砲二隊中の優秀な観測班長加藤好友君（大阪）に間違いなかった。

横江君と加藤君は、昭和十八年六月満州国阿城駐屯当時、私共の中隊に観測手として入隊、私の内務班で訓練を重ね優秀な下士官となったが、終戦後コムソモリスクの第八分所まで一緒だった。しかし昨年十二月風邪で発熱したので、私が軍医にお願いして中央病院に入院させて貰ったままだった。「まさかあの元氣者が」と思いながら横江君と丁寧（丁寧）に担架に載せて墓地中央の一番高いところに安置した。そして原隊の戦友達

全員を集めて遺髪を切り同郷の横江君に託した後、全員で冥福を祈りながら、「ゆっくりと休ませよう」と墓地の中央部に大きな穴を掘って野花を捧げ代わる代わる皆で土饅頭を盛り上げた。いつの日か必ず迎えに来ることを誓って、その目印として小さな白樺の木を墓の北方・メートルに植えた。

(註) 私は一九九四年七月、第六次コムソモリスク地区の墓地調査班長としてこの墓地調査を行ったが、この位置は既にソ連邦の宇宙観測基地となり、大きな通信施設が建設されて近づくことも許されなかったので、私は近くの野辺に野花と加藤君の大好きだった日本酒と線香を捧げて遺骨収集のできないお詫びをしてきた。

私と横江君は、収容所に帰って営内で働いている中隊の戦友達に加藤君との奇遇を告げて回った。そしてあの何百人もの遺体埋葬作業中に戦友横江君に発見され、私ははじめ原隊の戦友に見送られ埋葬されたこの奇遇は決して偶然ではない、「これこそ加藤君の靈魂が私どもを導き、そして別れを告げたのだ」と皆で泣き

ながら、一晩中加藤君の話が続いた。

私はその夜から続けて二晩加藤君の夢を見た。加藤君が観測班の中で一番重い砲体鏡を背負って禿頭に汗いっばいにじませて私の後を追ってくる夢や、加藤君が満期除隊となって阿城駅から日本に帰るということで私と横江君が手を振って別れを惜しむ夢だった。

私たちはそれから毎日、作業が終わると加藤君の墓前に白樺の枯れ枝を積んで炎々と燃やして帰ることにした。それは加藤君はじめここに眠る戦友達の霊に捧げる我々のせめてもの「鎮魂の灯」であった。線香も蠟燭もなく僧侶もないシベリアの荒野でできる唯一の儀式であった。それから夏中、日本人墓地には毎晩鬼火が燃えるという評判が立つようになった。

収容所長やソ連側スタッフは、そんな墓地で一生懸命に埋葬作業をする我々に心から感心している様子だった。私は、国や人種が違っても人間同士みんな同じなのに、なぜ戦争し殺し合わなければならないのかという疑問をしみじみ感じたものだった。

そして私がこうして亡くなった戦友の屍体埋葬とい

う尊い作業に携わることができたこと自体、私の生涯にとつて素晴らしいことであると思つた。特に横江君や原隊の戦友たちが「隊長、屍体埋葬の仕事を引き受けた渡辺さんを恨みましたが、こうして加藤戦友達まで立派に埋葬できた今、本当によかつたと思います」という戦友達の話を聞いて涙が出た。

それから毎夜赤々と燃える鎮魂の灯に戦友の冥福を祈りながら、「俺たちはいつの日か生きて日本に帰れるだろうか」と思う日々が続いた。だが、「ダメイ」の話はバツタリ途絶えたまま埋葬作業は八月下旬まで続いた。窪地屍体置場から戦友の遺体を一人残らず正式墓地に埋葬し私どもの任務を達成した時、その埋葬人員は確かに六百人を超えていた。

忘れもしない昭和二十一年八月十五日の朝、赤鬼所長から「渡辺中隊は日本人墓地整備に全員出役せよ」との命令があつた。私は中隊の戦友達を励まして墓地を整備し、墓地の一つ一つに野花を捧げ周囲を清掃していると、所長以下ソ連のスタッフ一同が盛装で揃つてやつてきた。そして野草で作つたソ連式の大きな花

輪を捧げて、ソ連式の鎮魂の儀式でいかめしく祈つてくれた。

それから赤鬼所長は、私ども中隊の前に立つて「渡辺中隊の努力によつて日本人墓地が立派に出来た。皆さんに感謝する」と言い脱帽してわれわれに礼を言ってくれた。私は、その日が日本敗戦後まる一年目であることと、私どもの隊だけこの墓地に集めて戦友の慰霊をしてくれた赤鬼所長に軍人としての友情を感じ、心から感謝した。

それから私どもはみんなで枯れ木を集め最後の訣別だと特に大きな薪火を捧げて、戦友の眠る墓地を後に収容所に入った。収容所から見える墓地にはそれから「鎮魂の灯」は赤々と燃え続けていた。

異国の丘シベリア抑留

長野県 高嶋 利春

昭和十八年七月二十六日、徴兵検査。